

27. ^{111}In -chloride 骨髓シンチグラフィの血液疾患における有用性の検討
——骨髓生検像との対比を中心として—— 藤島 譲他 1438
28. 当院における甲状腺癌の ^{131}I 内用療法の現況 川瀬 良郎他 1439
29. $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ を用いた甲状腺シンチグラムの検討 伊藤 信昭他 1439
30. $^{201}\text{Tl-Cl}$ による甲状腺癌の転移の検出 永井 清久他 1439
31. 甲状腺腫瘍におけるタリウムシンチグラフィの有用性について 佐藤 伸夫他 1439
32. 甲状腺髓様癌および副腎褐色細胞腫における $^{131}\text{I-MIBG}$ シンチグラフィ 曽根 照喜他 1440
33. Non-functioning parathyroid Cyst のシンチグラム：特徴的な集積像について 福永 仁夫他 1440

一般演題

1. 肺癌における最近の各種腫瘍マーカーの検討

新屋 晴孝 平木 祥夫 藤島 譲
 戸上 泉 加地 充昌 白神 敏明
 武田 芳弘 木本 真 上者 郁夫
 橋本 啓二 森本 節夫 青野 要
 (岡山大・放)

原発性肺癌23例(腺癌7例、扁平上皮癌7例、小細胞癌7例、大細胞癌2例)についてCA 125, NSE, SCCの値を測定した。

肺癌全体での陽性率は、CA 125はcut off 35 U/mlで52.3%，cut off 65 U/mlで34.8%，NSEはcut off 10 ng/mlで33.3%，SCCはcut off 2 ng/mlで42.9%であり、それぞれ腺癌、小細胞癌、扁平上皮癌で他の組織型に比し高い陽性率を示した。

臨床病期別では、CA 125, NSEは病期の進行に伴い增加傾向がみられたが、SCCにはみられなかった。

3種の腫瘍マーカー間には、相関はみられず、肺癌の組織別に応じた腫瘍マーカーの選択が有用であると思われた。

2. 肺癌における各種腫瘍関連抗原(CEA, TPA, CA-125, SCC)測定の意義

福永 仁夫 柳 真佐子 大塚 信昭
 曽根 照喜 永井 清久 村中 明
 吉川 高子 柳元 真一 友光 達志
 森田 陸司 (川崎医大・核)
 松島 敏春 (同・呼吸器内)

肺癌51例(腺癌26例、扁平上皮癌20例、未分化癌5例)について、その血中CEA, TPA, CA-125, SCC, NSE濃度を測定し、その臨床的意義を検討した。腺癌では扁平上皮癌に比して、CEA, CA-125濃度の高値例が多く、他方、扁平上皮癌ではSCC濃度の高値例がより多く観察された。TPAに関しては、腺癌、扁平上皮癌ともにほぼ同等の陽性率を示した。未分化癌ではNSEの高値例が多く観察された。

TPAとCEA濃度を測定し、併せて評価すると、肺癌および扁平上皮癌ではともに、90%以上の陽性率を示した。

3. NSE(r-エノラーゼ)と塩野義「SD-8570」の比較検討

久保 嘉彦 片岡みどり 赤木 直樹
 小川 恭弘 (高知医大・放部)
 西岡 正俊 山本 洋一 前田 知穂
 (同・放)

二抗体法による Neuron Specific Enolase の測定用キ

ット「SD-8570」とNSE(r-エノラーゼ)について基礎的・臨床的検討を行い、両キットの比較検討を行った。

標準曲線の変動、再現性、回収試験、希釈試験、腫瘍マーカーとの相関等の基礎的検討と、196例による臨床的検討を行い、次のような結論を得た。

1) 試薬の分注量、第一反応時間、測定範囲等に相異点があった。

2) 再現性、希釈試験、回収試験等の基礎的検討の結果は両キットともに良好であった。

3) 臨床応用上差異は認められなかった。

悪性腫瘍特に神経芽細胞腫、肺小細胞型未分化癌の診断・経過観察に有用であった。

以上の結果より、各施設に適応したキットの選択が望ましい。

4. NSE (neuron-specific Enolase) の RIA キットの基礎的、臨床的検討

阿多まり子 宇都宮富代 渡辺 弥生
安原 美文 伊東 久雄 飯尾 篤
浜本 研 (愛媛大・放)

本キットは、同時再現性、日差再現性、回収率、交叉反応、希釈曲線、ともに良好な結果を得た。

測定時には、抗凝固剤のEDTA、ヘパリンの使用、また溶血清の使用は不可と思われる。1stインキュベーション温度は、4°Cもしくは、20°Cであるのが適当と思われる。

健常者50名を測定し、基準値を2.4~9.2 ng/mlと求めた。

臨床的には、小細胞癌、大細胞癌で、85.7%と高い陽性率を示し、子宮癌、悪性リンパ腫、その他の悪性腫瘍、良性疾患では、陽性率を示す例が少なかった。

5. mid-molecule PTH RIA の基礎的および臨床的検討

福永 仁夫 柳 真佐子 大塚 信昭
曾根 照喜 永井 清久 村中 明
古川 高子 柳元 真一 友光 達志
森田 陸司 (川崎医大・核)

mid-molecule PTH (M-PTH) の RIA キット(ダイナボット社)の基礎的、臨床的有用性を検討した。M-PTH

の測定は、[Tyr 43]-h(44-68) PTH を standard ¹²⁵I-beef (37-84) PTH を tracer に、抗 M-PTH チック抗血清を抗体に用いた系で行った。最小検出濃度は 31.2 pmol/L であり、希釈試験、回収試験、再現性も良好であった。原発性副甲状腺機能亢進症では36例中23例が M-PTH 濃度の高値を示し、C-PTH 濃度の測定を併用すると、その診断率はより向上した。慢性腎不全症における M-PTH 濃度は全例で高く、N, Intact PTH 濃度と良好な正相関性($r=0.74$)を示した。

6. Bifunctional Chelating Agent を用いるモノクローナル抗体の ^{99m}Tc 標識

古川 高子 福永 仁夫 森田 陸司
(川崎医大・核)
荒野 泰 横山 陽 (京大・薬)
遠藤 啓吾 鳥塚 菲爾 (同・放・核)

放射性核種により標識された monoclonal 抗体の腫瘍等の Radioimmunodetection への利用は現在活発に研究が進められている。特に in vivo 使用に適した金属核種による標識抗体への要求が強く、¹¹¹In、⁶⁷Ga についてはすでに標識法が確立されているが、臨床使用に最も望ましいと考えられる ^{99m}Tc については満足な標識法が得られていない。そこで ^{99m}Tc と安定なキレートを形成する Dithiosemicarbazone 部位を持つ CE-DTS を Bifunctional chelating agent に用いる monoclonal 抗体の ^{99m}Tc 標識について検討したところ、抗体活性の保持と同時に ¹³¹I、⁶⁷Ga 標識体と同等の安定性を有する ^{99m}Tc 標識抗体を与える標識法を確立することができた。

7. ¹³³Xe 組織クリアランス法による実験腫瘍での加温時の血流動態について

菅 一能 横山 敬 沢村 和夫
(山口大・放)

ICR マウスの右足底部皮下に移植した、エールリッヒ腹水癌腫瘍の血流量を ¹³³Xe 局所クリアランス法により測定し、加温直後の腫瘍血流量の変化を検討したので報告した。

¹³³Xe 局所クリアランス法による血流量測定の変動率